

広報こがまち

KOHO KOGAMACHI

9

SEP 1997
No. 488

人を助けることは
自分を助けること

パキスタンの北西辺境州の州都ペシヤワールには、1979年に始まった隣国アフガニスタンの内戦の影響で、多くのアフガン難民が押し寄せている。およそ20年に及ぶ内戦は、六百万人の難民と二百万人の死者という犠牲者を生んだ。古賀町で育った一人の医師が、ペシヤワールに出会い、ハンセン病を中心とした医療活動を始めたのは、15年前。何が彼をペシヤワールに駆り立てているのか。医師中村哲を追う。



中村 哲

— 医師 —

『困った人を放っておいて、
自分はこのうのうと生きている。
この不条理は何だろう?』

そんな疑問が、中村医師を医療活動へ導いた。

1 PLS(ベシャワール・レブローシー・サービス)での診療風景。PLSは、現在入院ベッド数は40床、スタッフは37名です。ここへ年間約1万人の外來患者と約600名の入院患者への治療が行われます。

2 病気の早期発見のため巡回診療に向かう中村医師。巡回診療は、無医地区に医療スタッフが赴き、ハンセン病をはじめとするあらゆる病気を発見することを目的としています。



そんな危険と隣合わせのなかで、医療活動は始まりました。ハンセン病根絶へ向けた戦いの幕は、こうして上がったのです。

ハンセン病と向き合う

実際に医療活動を開始する2年前(1982年)に、中村医師は赴任地であるベシャワールを下見し、そこで、ハンセン病を看る外科医が不足している現実を知ります。ハンセン病とは、らい菌による慢性的細菌感染症です。らい菌は主に皮膚と末梢神経を冒し、様々な皮膚症状と感覚障害、運動麻痺が主症状となって表れます。かつては不治の病と言われていましたが、現在は有効な治療薬が開発され、早期に治療を開始すればほぼ完治する病気です。

「同じ医療協力をするのなら、一般の医師はたくさんいたので、

そんな危険と隣合わせのなかで、医療活動は始まりました。ハンセン病根絶へ向けた戦いの幕は、こうして上がったのです。

「でも、使命感なんていう大それたものを持っていた訳ではないんです。ただ、困っている人がいて、それを見ないふりして自分が楽をするというのは、どんなものかなと思っただけなんです。」

静かな語り口で、そう中村医師はつけ足しました。その言葉からは、「知ってしまった」から自分ができることはしようという率直

「なぜベシャワールなのかというのを、よく聞かれます。ほかにも救援を待っている国や地域があることも知っています。でも、餓えかかった我が子を親が見捨てられないのと同じで、放り出すことはできません。目の前にもあるものを、見ないということはできないんです。一所懸命、目の前にあるもの(ベシャワール)について考える。今はそれだけしかできないんです。」

そう言って笑う中村医師。現実を見据えている力がそこにあり、すべて人々は貧しく、治安も悪いところですが、しかし、中村医師はこう言われます。

「ベシャワールには、愛憎も苦

登山を楽しむために訪れた土地—ベシャワール—

中村医師がベシャワールへ初めて訪れたのは、1978年。福岡の山岳会(福岡登高会)のティリチ・ミール遠征隊に参加してのことです。

「遠征隊には、必ず医者が同行するんですよ。当時、パキスタンの観光省から、住民の診療拒否をしないよう申し渡されていて、みちみち病人を看ながらキャラバンを続けたんです。どこから聞きつけたのか、遠征隊がくることは知れ渡っていて、患者の群れは増え

るばかりでした。薬は遠征隊のために残しておかなければならないので、処方箋を書き、都会の大きな病院へ行くよう言いますと、『町でちゃんとした治療が受けられるのなら、わざわざ二日もかけて先生のところまでこない。』という返事が返ってきましてね。現地の辺境は今でもそんな土地です。」

その出会いから6年後、医療活動は始まった

「登山や旅行でベシャワールへ

不足している分野で協力したほうが良いと思っていました。」

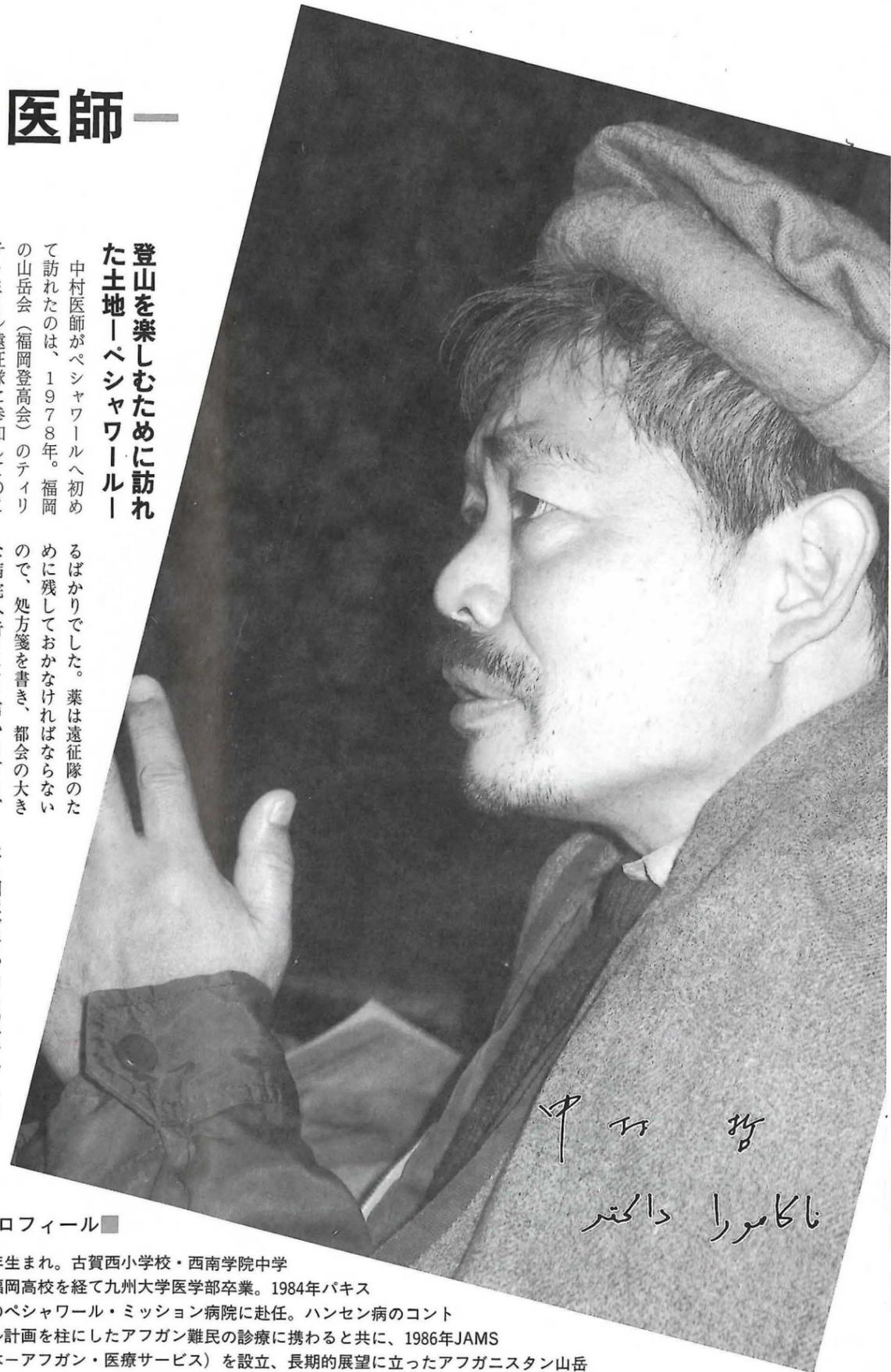
1112。そんな単純な答えを出すかのように、中村医師はハンセン病に取り組むことを決意しました。そして帰国後、国内外でハンセン病に関する研修を受け、改めて1984年にベシャワールのベシャワール・ミッション病院に赴任した後、現在はPLS(ベシャワール・レブローシー・サービス)でハンセン病と向き合っています。

「そのころのベシャワールは、アフガニスタンでの内戦が激しさを増したため、アフガニスタンが北西

「なぜベシャワールなのかというのを、よく聞かれます。ほかにも救援を待っている国や地域があることも知っています。でも、餓えかかった我が子を親が見捨てられないのと同じで、放り出すことはできません。目の前にもあるものを、見ないということはできないんです。一所懸命、目の前にあるもの(ベシャワール)について考える。今はそれだけしかできないんです。」

そう言って笑う中村医師。現実を見据えている力がそこにあり、すべて人々は貧しく、治安も悪いところですが、しかし、中村医師はこう言われます。

「ベシャワールには、愛憎も苦



中村 哲
ナカムラ テツ
ダクター

■プロフィール■

1946年生まれ。古賀西小学校・西南学院中学校・福岡高校を経て九州大学医学部卒業。1984年パキスタンのベシャワール・ミッション病院に赴任。ハンセン病のコントロール計画を柱にしたアフガニスタン難民の診療に携わると共に、1986年JAMS(日本-アフガニスタン医療サービス)を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン山岳無医村地区での診療モデルの創設を目指しつつ現在にいたる。著書に『ダラエ・ヌールへの道』『ベシャワールにて』『アフガニスタンの診療所から』などがある。現在 PLS院長 JAMS顧問医師 馬場病院副院長



巡回診療の途中で診察を請われる中村医師。辺境の地では、診察を受けられる機会は極めてまれです。



JAMS（日本-アフガン医療サービス）で診察を待つ人々。朝5時から行列ができます。



将来辺境の地で診察することになる少女たちにハンセン病について教授する中村医師。



国境を越えたアフガニスタン内にあるJAMSダラエ・ヌール診療所の診療風景。



ペシャワールで建設中の新病院。来年の4月に完成する予定です。

荒々しい現地の暮らしを
想像させないやわらかさは
気負いというものがなければだろうか



楽も悲しみも喜びも素直に表現できる、手ごたえのしつかりとした人間がいます。そのことを幸せに思っています。」
それは現代の日本には失われつつあるものではないでしょうか。

ヤワールへと導かれたのは、古賀町の自然も大いに影響していると思われ。

「人間だれしも幸福でありたいと願います。その中に、『自分だけ幸福ならそれでいい』という気持ちも含まれていることではないでしょうか。本当にそれで幸福だと言えるのでしょうか？」

「古賀町は、今もいいところですが、昔もいいところでしたよ。海が近くて、自然も豊富で。小学1年生の夏から20代の後半まで住んでいたんですが、筵内から清滝、犬鳴山系、西山まで行って遊んでましたね。昆虫採集が好きでしたから。古賀郵便局（旧古賀郵便局）の吉川さんという局長が、よく（昆虫採集に）連れてってくれたのを覚えています。」
現在古賀町にはお姉さんが暮らしており、今年のお盆には帰郷したとのこと。また、偶然にもお話を伺った8月18日は旧古賀郵便局が解体された日でした。それを聞いた中村医師は、驚きながらも昔を思い出すように目を細め、昔を懐かしんでいるように見えました。山と蝶を愛するようになり、ペシ

中村医師は、アフガン難民を救うのは、アフガン人の手によって行うべきだと考えています。JAMS（日本-アフガン・医療サービス）はその意志が形になった医療サービス団体で、ハンセン病を含んだ一般診療が行われており、運営資金はすべて寄付金です。ペシャワールにある本部のほか、帰りたくても荒廃して住む場所ではなくなったアフガニスタンで、医療面での不安を取り除けるよう、国境を越えて三地域に診療所も開設されました。現在難民の数は徐々に減り、荒野も農地に姿を変えつつあるそうです。

「今、現地で人材育成に力を入れています。私がいなくなってもこの活動を継続していかなければ、今まで築き上げたものが無駄になってしまうし、やはり、アフガニスタンに人を助けることは、自分が助かることです。」
その言葉に、中村医師の答えを見たように思います。
生と死が隣合わせになっているペシャワールで、中村医師の医療活動はこれからも続きます。

昔の仲間が頑張ったおかげ

応援せんとね

1. ペシャワールハンセン病院建設基金古賀有志の会

「昔近所に住んでいた仲間がすごいことをしようと聞いて、こりゃ自分たちも何か力になりたいねえと話していたところ、一人二人と集まってきてこの会ができました。」
会の成り立ちを亀田代表に伺うと、そんな答えが返ってきました。会の目標は、ペシャワールに現在建設中の新病院の建設資金を集めること。新病院は建設中ではあります。その建設・運営資金はまだ目標額に達してはいません。

中村医師の話では、土台・骨組みなど、できることから始めて、内装や医療器具は資金が集まり次第考案するということ。そんな友人を少しでも力づけようと、今年の5月から活動は始まりました。会のメンバーは、かつて中村医師が古賀町に住んでいたころ、近所に住んでいた遊び仲間が中心になっています。

「何か相手を打ち、一本が好きやつたよ」「辛抱強い人やつたよ」と同窓会のような会話が花が咲くこともあり。

取材を終えて
特集を組むにあたり、広川町にある馬場病院を訪ねて中村医師にインタビューをお願いしました。お会いする前に読んで著書や新聞に掲載されたエッセーなどから、勝手に猛々しいイメージを作っていたのですが、出会った瞬間にそれは消えてなくなりました。なぜなら、「遠いところをよくおいでくださいました」と気遣い、インタビューの途中で診察にたつきも申し訳なきように席を外される、そんな静かな姿を見たからです。ですから、こんな優しい人になぜペシャワールで活動を続けているのか不思議になりました。

15年間支援しているのは寄付金が

生きた医療に使われているから

1. ペシャワール会 事務局

毎週水曜日、午後7時。福岡市内にあるマンションの一室には、ペシャワール会事務局の会員たちが集まっています。仕事や学校の帰りに学生や主婦など、その立場はまちまちです。会員一人ひとりが可能な範囲で、工夫しながら支援活動を行うことが会則のため、7時より早かったり遅かったりしながら、部屋は8時にはいっぱいになります。

会員のお一人は、中村医師の印象をそう言うてにっこり。私利私欲など考えない中村医師に魅かれて入会したと語ってくれました。現地の活動資金は、日本全国にいるペシャワール会の会員による寄付金で運営されています。この中に中村医師の給与は含まれていません。1996年度の会計報告では、94%が現地活動費として、残りの6%は会報の発行・事務局の家賃などと明確に会報の中で発表されています。（1996年の

全事業額は八千八百八十九万四千三百一十円でした。）
また、会員の中からボランティアとしてペシャワールへ渡った医師・看護師・レントゲン技師などもおられます。伺った8月27日には、看護婦として活動している藤田千代子さんが一時帰国されておられ、現地報告が行われました。自由な会風の中から生まれる大きな支援力は、中村医師の魅力と生きた医療活動にあるようです。

「いなくなる」という仮説には、ご自身の死さえも含まれています。その想いの深さが、「ペシャワールは我が子と同じです」と言い切る理由でしょう。何の見返りも期待しない無償のものであると感じられました。
人間だれしも幸福でありたいと願います。その中に、『自分だけ幸福ならそれでいい』という気持ちも含まれていることではないでしょうか。本当にそれで幸福だと言えるのでしょうか？」
中村医師はそんな疑問と向き合ったのだと思います。そしてその疑問に対し、まやかしの答えでは納得できなかったのではないのでしょうか。
「人を助けることは、自分が助かることです。」
その言葉に、中村医師の答えを見たように思います。
生と死が隣合わせになっているペシャワールで、中村医師の医療活動はこれからも続きます。

※ 記載した写真は、ペシャワール会事務局よりお借りしました。